

我国マルクス婦人の頭脳発見

(一) 山川菊栄

△無産婦人は山川菊栄氏に意見の訂正を要求する▽

一

我国マルクス婦人の特徴とも見るべきは、そのお歴々が、揃いも揃って、「思索」する女としての水準に達していないことだ。

故に、彼女達は、その政治観、文学観、婦人観等において、そして特にそれが原理以外の「現実」の問題である時、常に、実に常に、重大な過ちを犯しつつあるのだ。

早くいえば、彼女達の為しうることは、その夫、その兄からの口真似であり、従ってそれらの「男」の視野の及ばない、例えば婦人の現実の「性」「母」等の問題等について、

彼女達が最も不得手であることは、あまりにも当然だ。

然しながら彼女達の任務は、婦人大衆の組織にある。されば婦人大衆の現実の諸相に潜入し、そこよりして一つの指導理論を引き出すことは、そしてそれを学理的にまでも高めることは、当然彼女達の為さなければならぬことである。

男たちは現にその関係する限りの分野を、哲学であれ、文学であれ、最近にあつては数学までも、勇敢に唯物史観のもとに批判し、全ての「ブルジョア」意識に対し、いわゆる「プロレタリア」意識を確立しつつある。

然るに彼女達のみは、彼女達の関係する分野にあつて、そうした努力を欠くのみか、ブルジョア思想を、そのまま採用しているのだ。

かくの如き思想的怠慢は、何によつて生じたか。それは、彼女達にいう所の「弁証法」的の力量なく、また婦人大衆を現実組織せんとするの熱意なきによるという外はないのだ。

二

エレン・ケイの恋愛観および母性観が、疑いもなくブルジョア恋愛観であり母性観であることは、今や婦人大衆によつて、いわゆる自然発生的、断片的には、しかと「感覚」されている所のものであることは言うまでもない。

そして、それらの自然発生的、断片的の感覚が当然、無産婦人の陣営において、学理的に統一整理され、そこよりして彼に對立する我の、新恋愛観および母性観を確立するのであることもまた言うまでもないのである。

然るに山川菊栄氏は、その著『婦人問題と婦人運動』（文化学会出版部発行）において、「ケイの思想は理論上何人も当然としなければならぬ」（一二〇頁）と言ひ、「ケイの主張した結婚制度の理想、母性の権利は、人間がまだ物質により、私有財産によつて支配されなかつた原始時代には既に経験したところであるし、（いかなる理由があつて氏はかかることをいうのか不思議だ。原始のそれとケイの理想とは余りにも違いすぎている）将来社会が再びその羈絆を脱する時代には、当然再現せらるべき理想である」（一一八頁）と称して支持している。

この奇怪なる言説は何処からきたものであるか。第一に考えられることは、山川氏のこのエレン・ケイ批評は、ごく粗雑な意味に解すべきであらうということだ。例えば氏がケイを支持する所以は、ケイが「恋愛および母性の自由」（その自由の内容は氏は問わないのだ）を唱えたという漠然たる理由からきたもので、それと同じ筆法で行けば、例えば今どき無産者の立場からルソーを支持して、「ルソーの思想は、何人も当然としなければならぬ」などというのと同じではないか。何となればルソーは「人類の自由」（その自由の内容は問わず）を唱えたからである。

然し、そうした粗雑な意味における氏のエレン・ケイ批評もしくは放言は、厳格な階級観に立脚する婦人として、あまりにもアイマイな超階級的な態度であるし、ましてそれが無産婦人に与えるために書かれた婦人問題批判の著書であるにおいて一層その無責任さに驚く外はないのだ。

しかも、氏の放言は、さらに続くのである。いわく、「ケイの思想は何人も当然としなければならぬが、大多数の人々にとつては、理論の当否よりは、いかにしてそれを現実の社会で可能にすることが出来るかという点だけが問題である」(一二〇頁)

すなわち、氏の考えによれば、無産婦人はケイの思想を、理論の当否などは構わず、頭から信じて早くそれを実現せしめたいといふことのみを問題にしているようだが、果してそうであるか。「理論の当否は少数者の問題で、大多数者は少数者が与えてくれるものであれば、何でも承認する。従つて、理論の当否などといふことを、彼等は少しも問題にはしない。彼等の問題とすべきこと、即ち彼等の仕事は、与えられた理論を、実現するために働くことにある」といふ氏の考え方は、明らかに誤謬であつて、「理論の当否」(支配者が常にアイマイに葬り去らうとする所の)を、飽くまでも追求し、断乎として当否何れかを決定するものこそは、大多数者でなくてはならぬ。

今、私が、その大多数者の一人として、「理論の当否は問題ではない」と、ことさらにアイマイに葬らんとする氏に対し、その訂正を要求するのは、きわめて必然のことなのだ。

三

氏が我々無産婦人に「超階級的の思想」とであると称して、押し付けんとしつつあるエレン・ケイの思想は、いかに我々にとつて憤懣に値するブルジョア思想であることか。以下私はそれを順を追うて述べて見よう。

第一に、彼女の恋愛観および母性観は一九世紀末から二十世紀当初にかけての世界思潮——ジュームスの意志論、ベルグソンの意識論等、唯心的進化論を根底としている。故に彼女の主張は、絶対的に唯心的であり、進化論的だ。

さてまた第二には、彼女の結婚観、育児および教育観は、従来の支配者的観点に立脚するもので、断じて無産者のそれではない。まず彼女の恋愛観を見よう。彼女は恋愛を次のようなものだといっている。

「二つの心霊が、その感覚の分有している愉樂をもち、その感覚がその心霊の高尙化している歓喜をもつ時、その結果は単なる要求ではなく、また単なる友情でもなく、両者とも一つの新しい感情に吸い込まれているので、そのどちらの一方にも比すべきではない。恰も空気が、その組成要素の一つに比すべきでないと同じである。偉大なる恋愛は、ただ一つの異性の内的要求が、その対性の心霊に対する熱望と、全く合致した場合に生ずる」(原田実氏訳に拠る)

いかに高尙な恋愛。そしてこうした恋愛こそ結婚の基礎とされなければならないので

あると彼女はいうのだ。

然し、それではそうした恋愛ならば、直ちに結婚へ進んでよいかと言えば、否。例えば年の若い者とか、秘密の結婚しかできぬ事情にある男女の場合、またはどちらかの一方、あるいは双方が、伝染病とか、身心に不具な個所のある場合とか、あるいは血統の不純、あるいは両者の環境の不一致等の場合にあっては、たとえ前のような高尚な恋愛を双方で感じているにせよ、断じて結婚へ進んではならない。従つて恋愛即結婚というわけには行かない。

結婚に対する、こうした制限は、ひいて恋愛をも制限することなくて何であらう。何となれば恋愛は結婚（ここでは肉体的関係の意味）あつてこそ始めて意味があるからである。エレン・ケイは「恋愛から結婚へ」の主張者であるが、それはより多く形式においてそうであるのみで、その実は「結婚のための恋愛」論者に過ぎないのだ。

一口にいえば、「適当な場合を外にしては無闇に恋愛をしてはならぬ。然し、一旦恋愛をする場合にあつては、最も心靈的な靈肉一致の恍惚境を目がけよ」というのであるが、男女関係に分別や制限などがあるのでは、注文通りの高尚な恋愛などは出来そうにも思われない。男女関係は自然のもので、人間があれこれと考えても、思い通りの結果は得られぬ。

昔、封建時代の様子が「大きな男は強い女としか結婚してはならぬ。また背低の女と病

身の男とは断じて結婚まかりならぬ」といったが、これが支配者的の結婚観であるが、エレン・ケイの場合も、そこにどんな理由があるかと、また意識的にはどうであらうと、支配者的の思想であることに変わりはない。

然もその支配者の思想が、猿知恵にとどまり、大して期待し得られぬのみか、かえつて不結果に終るということは、男女関係に対する人為的の干渉の、遂に無力であることを証明するもののだ。

エレン・ケイは若い者の結婚を否定する理由として、「なるほど彼と彼女とは恋し合っている。そしてその恋は、高尚な、心靈的な、好ましい恋のように見えるが、然し、果して永続性のある恋であるか、結合の権利とそれに付随する責任とを当然に有しているものであるかどうかは分らない」といつている。然し、それであれば年寄の恋愛にも同じことはいえる。すべての年寄の恋愛が果して永続性があり、結合の権利と責任とを有しているものであるかどうかということは全く神秘的な問題に属する。

また彼女は「若い樹はあまり重い果実の重みによつて裂け、あるいは曲ることがある。即ちここに自然が若年者の結婚に反対している事実を見る。故に人間にあつても若年者の結婚は否定すべきである」といつている。然し、それに対しては次のように答えることが出来る。「若い樹はあまり重い果実によつて自らを裂く前に、若い樹自身果実を実らせることへの衝動をすらも起こしたりはしないであらう。もしそんな衝動をその樹が起こした

とすれば、それは既にその樹が自らを裂かないまでに成育した証拠である。それと同じように人間にしても若い者の間に恋愛という——つまり果実をもつ前提としての衝動が起つたとしたなら、それは最早やそれによつて自らを裂かないまでに成育した証拠である、と見てよい。かりに一、二の例外はあつても、多くの若い樹がみな果実によつて自らを裂いている事実は認められない」

彼女はまた、「秘密の結婚しか出来ない事情にある場合の結婚は好ましくない。そういう結婚においては、婦人はたえずそこに子供が生まれはしないかと不安を感じるから、その不安がその子供の上に悪影響を及ぼす」といつている。彼女のいう秘密の結婚とか、公然の結婚とかいう言葉によつても、彼女の結婚観の何であるかはわかる。つまり彼女は恋愛をブルジョアの社会制度に順応せしめよという。彼女の恋愛観は要するにブルジョアの社会制度におけるものであり、それから一步も出たものではないのだ。

それと同じように、彼女の母性観も、今日の社会制度におけるものだ。これまでの社会にあつては、母性なるものは自然の姿においては考えられず、ギリシャの詩人が歌つたように、

子は生命を母に負うにはあらじ

母は父が点ぜし燃ゆる火を

護り庇うものぞ、彼女は唯

そのための雇われ人（職業者）

かくの如き考え方は、種々の形をとつて、比較的進歩的な思想の中にすらも現われてくる。例えばエレン・ケイは、母性の本能は後天的なものであり、子供に対する世話とか、それに伴う責任——つまり長い間のそうした習慣（雇われ人として、即ち職業人として）からの産物だと言い、多くの同時代の女権論者達の「育児の社会化」——即ち「子供が社会によつて育てられることになつても、母親の愛の宝庫は保持せられる。我々は日曜ごとに我々の子供を保育所に訪ねることが出来るから」という主張に反対して、「子供が社会によつて育てられるようになれば、母親の愛の宝庫は保持せられはしない。なぜなら母親の愛というものは、世話や責任からの産物だから、母親がそういうことをやめれば、その日から母親の愛はうすれて行く」という。

母親の愛というものが、事実そんなに不確かなものであるならば、育児が社会化して、幼児が母親以外の外の保母の手で育てられるようになつても、それは少しも不合理ではないではないか。何故、ことさら母親の愛というものを保持せねばならないのか、それが崇高な、いう所の「宝庫」であるからか。

それにしても、すべての母性に、母性としての本能がなければ、彼女は殆んど全く気軽ですらあるであらう。彼女は其の幼児を保母にであらうと、また何人にであらうと、少しのためらいもなく与えることができ、そのみでなく、殺してしまうこともできるの

だ。

が、彼女達母性は、その自らの母性愛を崇高とも思わなければ、野卑とも考えない代りに、それよりはもつと厄介な、例えば性欲とか、食欲とかに同じ生理現象として感ずる。崇高とか野卑とかいう精神的現象とその負担はいつでもその気になりさえしたら、はねのけることが出来る。厄介なのはすべての生理的現象と負担だ。

母性愛は自愛の延長だ。どんな原始的な生物にも自愛の本能はある。例えば死をいやがるといふような本能はどんな虫にもある。それは一種の運動の本能、自己持続の本能であると思われる。そして母性の本能はその延長である。

赤児というものは母親の一部分で、すべての点から見ても、母親の組織から極めて不完全にしか独立していない。母親の組織は赤児が独立するまでの間、母乳とか、無月経とかの異常な生理的現象を呈し、またその生理的のつながりによって、自らの組織（赤児を含むところの）を合理的に成長せしめ、発展せしめる。その合理的な成長と発展との過程を、何等かの原因によつて中断し、または離間することは、もとより不合理である。という意味においてのみ、母子の分離は不可能とされるのである。

彼女は、その唯心論的な理想論から母子の関係を説くけれど、然し、我々新しい時代の婦人は、生理学的にしかそれを解しないのだ。

またエレン・ケイは「母性の権利」ということをいう。それは、「母性は種族の中心で

ある」という考えから出ている。然し、母性が種族の中心で、男子が枝葉であるのは形の上のことで、種族に寄与するものは母性のみではない。男子もまたそうである。すなわち、何れが多く種族にとって必要であるか（重要であるか）などという比較論は成り立たない。母性であることを、何か「お手柄」でもあるかの如く煽て上げたのは、従来の支配者の不純な動機からである。ケイの思想には、大部分それが付きまとうている。

我々新しい時代の婦人は、「母性の権利」などということは言わない。母親が子を生み育てることは、母親個人からいえば一定期間における生理的現象である。また人類社会からいえば、人類社会が連带的にもつ自然現象である。この意味において、人類社会は当然、連带的に「母性の自然」（母性の権利ではなく）を生かす。

かくの如く、ケイのあらゆる思想は、支配者的、ブルジョア的のもので、その一特徴である唯心主義的、と共に功利主義的のものに外ならない。

四

山川菊栄氏が、かかるブルジョア婦人思想を、「思想としては何人も当然であるとすべきだ」とすることは、無産婦人として、異様な感がある。

且つ、氏によれば、無産婦人運動は、かかるブルジョア主義を支持して、進めらるべきであるという。が、これまた実に不思議な考え方だ。

然しながら、思うにこれらの全てのことは、氏の思想的無自覚の然らしめたことで、意識的に計画されたことではないだろう。だが一山川氏の自覚無自覚はこの際問題ではない。我々無産婦人は、該著書全部の撤回棄却を要求し、かかる悪書を抹殺すれば足りるのだ。